

# 遊び場面における「ノリ」とは

## —「ころがしドッジボール」の事例を通して—

“Rhythms” in the play scene  
—Through the case of “Rolling dodgeball”—

正部家 あゆみ  
Ayumi Shobuke

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード：遊び場面, 「ノリ」, 隣接対  
Key words : Play scene, “Rhythms”, Adjacency pair

### 1. 研究目的

保育の現場において、子どもの遊びが「盛り上がっている」と感じられる状態がある。門(2018)はこのような状態を「子どもが没頭して遊ぶ」姿として捉えており、「子どもが没頭して遊ぶ環境を支えるのは保育者の豊かな感性である。保育者自らの置かれた時間と空間の中で、子どもたちの心もちを保育者自身が豊かに感じ取る存在であるこ

とは、子どもたちが展開していく活動の伏線である」と述べる。すなわち、保育者はその場にいることで子どもの遊びを支えている存在であることが示唆されている。したがって、子どもの遊び場面において、保育者はその場の状態を捉えた上でその場に適した援助をすることが求められているといえる。

では、そもそも子どもの遊びが「盛り上がっている」、すなわち門(2018)の述べる「子どもが没頭して遊ぶ」という状態とは具体的にどういった状態を指すのだろうか。このような子どもが遊びに没頭している状態を指す概念の一つとして、岩田(2007a)の「ノリ」がある。岩田(2007a)によると、「ノリ」とは「関係的存在としての身体による行動の基底にあるリズムおよびその顕在の程度、すなわちリズム感、また身体と世界の関係から生み出される調子、気分」を指す。さらに岩田(2007b)は、保育者の役割として「子どもたちの遊び展開において、どのようなノリが生成されているのかを読み取り、そのノリが子どもたち同士で持続できるように関与すること」が必要であると述べる。つまり、保育者は子どもたちの遊びにおいて「ノ

リ」をどのように共有されているのかを理解することが求められているといえよう。

このように、岩田(2007a;2007b)の示す「ノリ」は、門(2018)の述べる「子どもが没頭して遊ぶ」という状態を示す概念の一つと考えられる。しかし、岩田(2007a;2007b)の示す「ノリ」は具体的な場面から定義されていないため、実際に保育の現場から「ノリ」を抽出できないと考えられる。よって、事例をとる者に委ねられず、恣意的な捉えとならないための「ノリ」の定義が必要である。そこで、本研究では「ノリ」という概念を保育の遊び場面における具体的な事例から実証的に定義したい。

したがって、本研究では保育の遊び場面の「ころがしドッジボール」の事例から、保育の遊び場面における「ノリ」とは何かを明らかにすることを目的とする。

尚、保育の遊び場面の具体的な事例の中でも「ころがしドッジボール」に着目する理由は、本研究の研究対象者となる園の5歳児クラスにおいて継続的に見られた遊びであり、この事例に着目することにより、より発展した遊び場면을捉えられるのではないかと考えたためである。

### 2. 研究実施内容

本研究の研究課題名は、研究助成申請時は「保育現場における保育者の実践知とは—『ノリ』に着目して—」であり、身体的同調である「ノリ」に着目し、保育者が「ノリ」をどのように作り出していくのかを明らかにすることを目的としていた。しかし、現段階では先に述べた研究課題名と研究目的としている。以下、その理由を述べる。

研究助成時申請時は、保育者の実践知を実際の保育現場における保育者と子どもとの関わりの中で、子どもの姿に基づいた保育者の行為から捉えることを目指し、より具体的には保育者が「ノリ」をどのように作りだしていくのかを明らかにすることを目的としていた。しかし、そのためにはまず「ノリ」とは何かを定義することが必要であり、本研究を進めるにあたり保育の遊び場面において「ノリ」がどのように構成されていくのかを分析方法の検討、データの分析を含めより詳細に検討することが必要であると考えた。よって、現在は「遊び場面における『ノリ』とは—『ころがしドッジボール』の事例を通して—」という研究課題名の基、保育の遊び場面の「ころがしドッジボール」の事例から、保育の遊び場面における「ノリ」とは何かを明らかにすることを研究目的として研究を進めている。このことが明らかになることによって、研究助成申請時の目的であった保育者がその場の状況を読み取り「ノリ」を意図的に作り出すこと、すなわち保育者の専門性の一つにつながるのではないかと考えている。

## 2-1 研究方法

### (1) 研究対象者

幼稚園におけるころがしドッジボールに参加する5歳児の子ども、及びその保育を行う保育者2名を対象とした。

### (2) 対象となる期間

2021年8月24日～2021年9月17日

### (3) 手続き

ビデオカメラ1台を研究実施者が手に持ち、子どもたちと保育者の動き等の映像及び音声を記録した。

### (4) 倫理的配慮

本研究は大妻女子大学生命科学研究倫理委員会より、承認(受付番号 03-006-1)を受け実施している。データの収集と取り扱いについては、対象となる子どもの保護者、保育者から了承を得た上で、名前は全て仮名で表記している。

### (5) 分析方法

まず、撮影した事例を会話分析のトランスクリプトを援用して分析をしている。会話分析とは、串田ら(2019)によると「人と人が相互行為をするときに行使している能力や用いている方法を探究することによって、人々がどのように社会生活を作り上げているのかを解明する」ものである。本研究で、会話分析における実際に生じた相互行為の

データの詳細な書き起こしであるトランスクリプトを援用することで、時間推移の中で子どもたち同士の間、あるいは子どもたちと保育者間で生じた事実を詳細に捉えることができると考えている。

また、草信ら(2009)は、保育場面において間主観的な参与観察およびVTR撮影から、保育の集団性に着目し子どもと保育者とが複数または集団でかかわっている事例を採集した。その結果、「リズム」と「動き」という要素を抽出し、「ことばのリズムで響き合う」、「からだの向きで響き合う」、「からだの形で響き合う」、「からだの動きとリズムで響き合う」、「からだの動きとリズムで響き合いを広げる」という5つの保育者の身体知の特質を明らかにしている。この「響き合い」という概念は草信らは(2009)「体によって行われ、体によって知られる」としており、身体による行為によって捉えられると考え、本研究において「ノリ」を捉える際の手がかりとなるのではないかと考えている。そこで、草信ら(2009)の5つの保育者の身体知の特質を参考に、「発される言葉」、「顔の向き」、「体の向き」、「体の形(姿勢)」、「体の動き」という5つの観点をトランスクリプトに組み入れて、子どもたち同士の間、あるいは子どもと保育者の間の相互行為を詳細に分析することにより、「ノリ」がどのように構成されていくのか、すなわち「ノリ」を構成する要素は何なのかを検討する。

## 2-2 現段階での結果

会話分析のトランスクリプトを援用して分析を進める中で、隣接対が構成されていることが明らかになった。隣接対とは、「2つの発話が行う行為のカップリングによる連鎖」(串田ら, 2019)を指す。

具体的には、「ころがしドッジボール」の鬼と逃げる者との間において、鬼が内野の対象の子に顔を向けると顔を向けられた子は逃げる姿が見られ、「追う」—「逃げる」という隣接対が構成されたと考える。また、鬼に顔を向けられたから必ずしも逃げるだけではなく、「狙う」—「構える」という隣接対も考えられた。この隣接対が構成された際には、「ころがしドッジボール」としての面白さや子どもたち同士の間における緊張感が高まっている状態であるとして、「ノリ」が構成される1つの要素となるのではないだろうか。一方で、鬼が内野の子どもを追わず、また内野の子どもも逃げ

ないという場合は、「追わない」—「逃げない」という隣接対が構成され、「ノリ」が下がっていく要素と考えている。このように、子どもたち同士の間、あるいは子どもと保育者の間においてどのような姿が見られるのかを分析することにより、「ころがしドッジボール」では鬼と内野の役割が遂行されることが「ノリ」を構成する一つの要素となると考えられる。

### 3. まとめと今後の課題

現段階では、「ノリ」を構成する要素として隣接対が見られることが明らかになっている。このことは本研究における「ノリ」には「ころがしドッジボール」の特性が含まれていることが考えられる。

また、「ノリ」は人と人との間だけではなく、人ともとの間においても生じるものではないかという仮説を立てており、会話分析のトランスクリプトによる分析だけでなく、「ころがしドッジボール」における人とボールとの間で生じる事実も見ていく必要がある。したがって、ボールのころがし方を含め、ボールを持った子どもの動きがどのように推移していくのかを分析していく。さらに、「ころがしドッジボール」に参加する子どもたちの人間関係にも着目しながら、「ノリ」を構成する要素を明らかにし、「ノリ」の定義を生成する。

### 付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所令和3年度大学院生研究助成(B)(DB2111)「保育現場における保育者の実践知とは—『ノリ』に着目して—」より研究助成を受け行ったものである。現在の研究課題名は、2.研究実施内容で述べた理由により、「遊び場面における『ノリ』とは—『ころがしドッジボール』の事例を通して—」に変更している。

### 参考・引用文献

- 門道子. 子どもが自発的に没頭できる遊びの本質とは—ある幼稚園の環境にかける保育の取り組みから—. 教職課程・実習支援センター年報(1), 2018, p. 52-53.
- a) 岩田遵子. 現代における「子ども文化」成立の可能性—ノリを媒介とするコミュニケーションを通して—. 風間書房, 2007, p. 115-116.
- b) 岩田遵子. 「幼児理解」の観念性を問い直す—保育者は子どもの創り出すノリによる「子ども文化」とどう向き合うか—. 関東教育学会紀要. 34, 2007, p. 13.
- 串田秀也・平本毅・林誠. 会話分析入門. 勁草書房, 2019, p. 6,78.
- 草信和世・諏訪きぬ. 現代における保育者の専門性に関する—考察—子どもと響き合う保育者の体知を求めて—. 保育学会研究台 47 巻台 2 号, 2009, p. 84.